## 巻　頭　言

# 「総合人間科学」研究のさらなる開拓を目指して

尚絅学院大学　学長　佐々木　公　明

120年前にアメリカの女性宣教師たちによって始められた小さな家塾に源をもつ、尚絅学院大学の歴史はそれほど長くはない。短期大学は1950年に開設されたが、所謂四年制大学は2003年の開始であるから、今年で10年目を迎えたに過ぎない。しかし、尚絅学院大学の教育理念は120年前の建学者の精神である、「キリスト教精神と豊かな教養によって内面をはぐくみ、他者への愛と奉仕の心をもって社会に貢献する人間を育成する」ことを揺るぎなく継承している。それ故、尚絅学院大学の「総合人間科学」もこの教育理念を実現する視点から構想され、教育・研究が開拓されるべきである。私は2009年９月に行なわれたFD・SD集会で「総合人間科学」の一つの定義として、「人間がより幸福になるためにいかに生きるべきかを究明する学問分野」を提案したことがあり、そこでは、総合人間科学部を構成する各学科は、いくつかの「幸福の要因」を体系的に、専門的に、精緻に扱うことがミッションであると考えた。「幸福の要因」としては、既に「幸福学」の研究成果が“Big Seven”として、家族関係、金銭的状況、仕事、友人、健康、個人の自由度、そして社会の価値観を挙げている。私は次世代の幸福に影響を与える自然環境も加えた８要因を考慮すべきと考える。

日本でも広く読まれている、ラッセル、ヒルティ、アランの３つの『幸福論』（いずれも岩波文庫）は、著者たちのバックグラウンド（国、職業）とそれぞれが書かれた年代も異なるにもかかわらず、「人間は幸福を目標として、努力して生きるべき」であると共通に主張しているのは驚くべきことである。例えばヒルテイは「幸福はあらゆる学修や努力すべての国家的および教会的施設の究極の拠り所である。幸福こそは人間の生活目標である」とし、アランは「幸福こそ最も美しい光景である。幸福になることは他人に対する義務である」とし、そしてラッセルは「幸福は獲得すべきもの」と結論付けている。だとすれば、人間が幸福になる生き方を研究するものとして、「総合人間科学」を大いに開拓すべきである。

ところで、「総合人間科学」の萌芽をアダム・スミスの『道徳感情論』に見ることができる。アダム・スミスは“経済学の始祖”と評価されているがそれは、中学校の社会科の教科書にも出てくるほど有名な著書『国富論』による。『国富論』第２章の有名な叙述「相手の利己心に訴える方が、望みを得られる可能性が高い。我々が食事ができるのは、肉屋や酒屋やパン屋の主人が博愛心を発揮するからではなく、自分の利益を追求するからである」（山岡洋一訳上巻17ページ）と相俟って、アダム・スミスは「相互に利益となる市場での交換の動機には、自己利益とか自己愛以外は必要ない」と主張している、という狭い歪んだ解釈が横行することとなった。最近は、この解釈が自由至上主義（リバタリアニズム）や市場勝利主義と呼ばれる、

規制緩和と競争的市場を推進する思想の根拠として利用されている兆しもある。しかし、アダム・スミスはまず最初に、グラスゴー大学での道徳哲学の講義を基に、『道徳感情論』を1759年に著し、1790年に没するまで、その改訂を加え続けたことを想起しなければならない。『国富論』は『道徳感情論』の初版から17年を経て1776年に刊行され、これも没するまで改訂が続けられた。つまり、両方の本ともアダム・スミスが死ぬ直前まで手を加えているが、人間の幸福な生き方を研究したアダム・スミスの体系の中心は『道徳感情論』であり、幸福の一部の要因である物質的充足を扱う『国富論』はそのサブシステムとして捉えるべきである。『道徳感情論』の索引から、同書で相対的に頻繁に言及される、或いはより重要なキーワードを拾い集めると:愛、家族、科学、神、観察者、教育、境遇（condition, situation）, 競争、キリスト教、公共、最高存在、財産、裁判官、死、自愛、慈恵、仁愛、自己規制、自然、市民、社会、自由、慎慮、人類、正義、戦争、想像、体系、適宜性(propriety)、中庸、哲学、同感、徳、道徳、富、美、美しさ、貧困、風習、富裕、憤慨（resentment)、文芸、文法、文明、平静、法、利己的、理性、良心、良俗、労働などが挙げられる。このように、『道徳感情論』は個人と自然、社会的環境に関わる極めて広範な領域を対象としており、総合人間科学が扱う領域を提供していると言える。

人間の幸福に迫ろうとする、アマルティア・センによる“潜在能力アプローチ”の起源は「アダム・スミスとカール・マルクス、さらに遡ればアリストテレスにまで遡れる」（セン『福祉の経済学』)。つまり私たちが教育・研究している「総合人間科学」は2000年以上に渡り、そのテーマを私たちに問い続けているのである。上述の３つの『幸福論』が、最も新しいラッセル著の原著は1930年刊行であるにもかかわらず、2000年以降に発表された心理学、経済学、社会学などの学際研究である「幸福学」のいくつかの重要な成果を哲学的に予測していることに驚嘆させられる。一つは、「金や財産をむやみに追うべきではない。ある水準以上の財産を求めることは、かえって人を不幸にする」とし、欲求水準を常に高める生き方を戒めているが、これは「幸福学」で何故ある水準以上の所得増加が幸福の増進に結びつかないかを説明する“快楽の踏み車仮説”の内容と一致する。他の一つは、「他人との比較、他人との競争に過剰に心を向けることは、心の安らぎを失う」とし、生活が豊かになっても他者との相対で“より豊かにならなければ幸福度は上昇しない”という「幸福学」の有力な仮説そのものを予測しているのである。

「総合人間科学」は生きている人間に力を与えることを究極の目的としている。その研究は、上述のように、2000年以上の歴史を有しており、その展開の過程で、異なる学問分野、異なるアプローチが同様な結論を得ている事実に興奮する幸運にも遭遇できる。まさにダイナミックな学問分野であるといえる。120年前の建学の精神を強固に継承している尚絅学院大学には、まさにこの「総合人間科学」を先頭に立って開拓していく動機がある。『紀要』を舞台にして、その熱い開拓の論陣が張られることを期待するものである。